

# Report on Treatment for the Display of Yukio Toda's "Basketball" (Kanazawa University Museum) : The Case study of restoration measures at a museum site

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: INOUE, Kanako メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00069249">https://doi.org/10.24517/00069249</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



遠田運雄《籠球》（金沢大学資料館所蔵）の  
展示に向けた処置に関する報告  
—博物館の現場における修復処置の一例として—

Report on Treatment for the Display of Yukio Toda's "Basketball" (Kanazawa University Museum) : The Case study of restoration measures at a museum site

井上 佳那子

INOUE Kanako

金沢大学 資料館 学芸員

Curator, Kanazawa University Museum

Abstract

At the Kanazawa University Museum, treatment for the display Yukio Toda's "Basketball" (oil on canvas, year of production unknown) , which is a collection work, was carried out. This work was exhibited at the 5th exhibition of Nitten in 1949, and after the donation to the university by the bereaved family in 1962, it was displayed in the university hall at the old campus located in the Kanazawa castle for a long time. It is introduced as a new collection in the "Kanazawa University Archives News No. 7".

In 2022, we received a request to display it in the front room of the President's office, and when we checked the condition, we found that it was significantly dusty and damaged overall, probably because it had been placed in a space where many people came and went for many years. The canvas was undulating, and many cracks and flaking of paint layer were observed. Since there was no back board, and the canvas was exposed, not only the accumulation of stains but also the slight vibration caused the canvas to shake greatly. In addition, there were many issues that were not suitable for display, such as nails and wires used for the hanging brackets, so it was decided to take improvement treatment for their use mainly on the back side.

In this paper, I report the details of the treatment performed this time and describe the treatment that were postponed and the treatment that will be required in the future.

## はじめに

金沢大学資料館では、収蔵資料である遠田運雄作《籠球》（資料番号：720-00-14-00021／油彩・キャンパス、制作年不明）の修復処置を行った。

2022（令和4）年4月、本資料を本学本部等学長室前室に展示したいとの要望を受けて対象資料の状態を確認したところ、全体的に汚損が著しく、キャンパスは凸凹に大きく波打ち、これに伴う多数の亀裂や剥落が確認された。また、裏板がない、吊り金具として釘や針金が使用されているなど、展示には適さない点が多々見受けられたため、裏面側を中心に活用に向けた状態改善のための処置を行うこととなった。本稿では、今回の処置内容を報告するとともに、今後必要となる対応などを検討する。

## 1 作者および資料来歴

遠田運雄（本名・久勝）は1891（明治24）年7月23日石川県金沢市に生まれ、幼少期より絵に親しんだ。慶應義塾普通科に入学後も制作を続け、養父母の反対を受けながらも1913（大正2）年に東京美術学校西洋画科に入学、岡田三郎助に師事した。卒業後、1922（大正11）年には朝鮮に渡り、京城帝国大学で講師として勤務しながら作品制作を続け、展覧会への出品も積極的に行っていた。1929（昭和4）年に渡仏すると、フォーヴィスムやキュヴィスムなどパリの前衛芸術家たちが数多く参加していたサロン・ドートンヌに入選を果たす。帰国後は文展（現在の日展）と鮮展への出品を続け、日展では功績が認められことにより無審査出品の資格を得て審査委員長も務めている。1946（昭和21）年、金沢美術工芸専門学校（現・金沢美術工芸大学）の創設に際して指導者として招聘され、1950（昭和25）年には金沢大学教育学部教授に着任した。<sup>1</sup>

《籠球》は1949（昭和24）年第5回日展出品作であり、1962（昭和37）年にご子息の遠田拓氏より金沢大学に寄贈された。具体的な時期は不明だが、城内キャンパス時代は大学会館に飾られていたようである。当館においては、「金沢大学 資料館だより〈第7号〉」にて「新収蔵資料紹介」として取り上げられている。ちなみに「金沢大学 資料館だより〈第6号〉」の「金沢大学所有美術資料一覧」では、所蔵は事務局として記録されている。

## 2 状態調査および損傷状態

### 2.1 資料の状態調査



図1 全図・処置前 (額付・表)

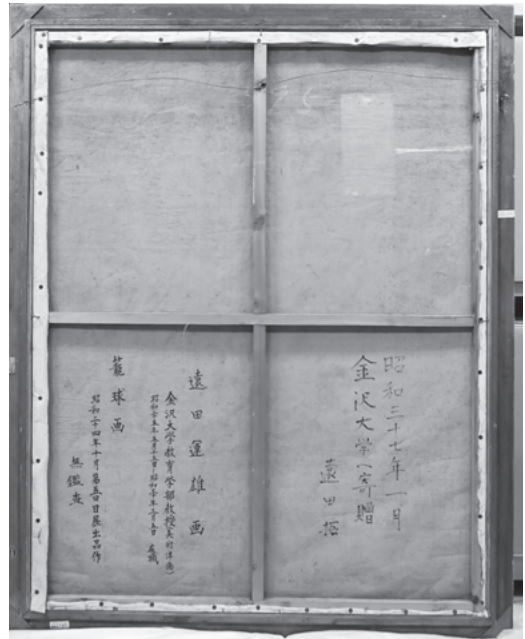


図2 全図・処置前 (額付・裏)



図3 全図・処置前 斜光撮影 (表)

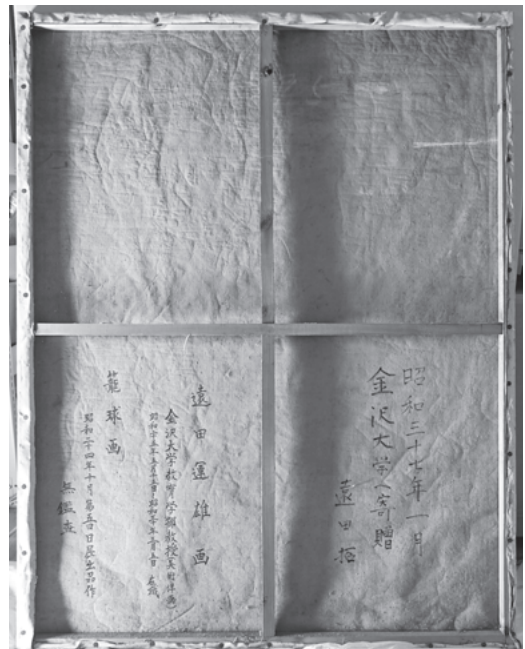


図4 全図・処置前 斜光撮影 (裏)

資料の形態的な基本情報は以下のとおりである。

作者：遠田運雄

作品名：籠球

制作年：不明（1949年頃と思われる）

描画材料：油彩

支持体：キャンバス

額縁：有

額寸法：158.0×127.0×奥行 6.6cm

支持体寸法：144.0×112.1cm（最大寸）

（左 143.7・中央 143.0・右 144.0／上 111.8・中央 111.7・下 112.1）

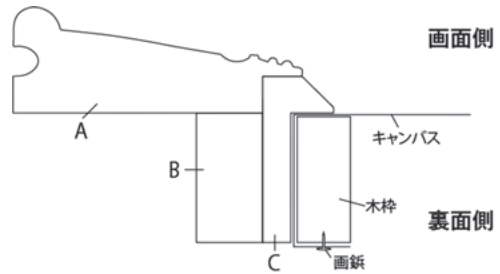


図5 額および作品の断面イメージ図  
図内、Aは額（金縁部分）、Bはドロ足（側板部分）、Cは入れ子を示す。  
（筆者作図）

本資料の額および作品の断面のイメージ図は図5のようになる。

【付属物・添付物】

- ・木枠に支持体が画鋳で張り込まれている。
- ・額裏面には添付物が複数ある。

右側：シール（下表）が添付されている。シール直上には黒字のスタンプが印字されている。  
（4桁の数字と思われるが読解困難）

金沢大学附属図書館	7年度取得
国立学校庁用品	3-292 帳
情報管理課	NO.7. - 17

左側：金地のプレート（下表）が釘留めされている。

金 沢 大 学 本 部	
国立学校庁用品	
3	NO. 54

【裏書き】

- ・キャンバス裏面、書き込みが複数ある。

右下・墨書き・縦方向（なお、周囲には鉛筆による下書きが残されている）。(図6)

昭和三十七年一月  
金沢大学へ寄贈  
遠田拓

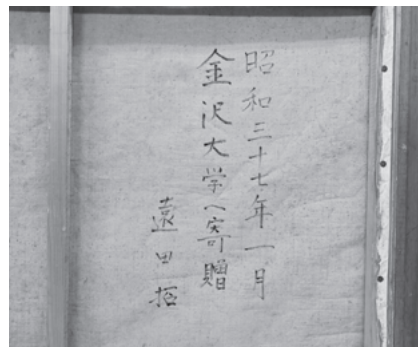


図6 支持体・裏面 右下



左下・墨書き・縦方向 (図7)

遠田運雄画

金沢大学教育学部教授 (美術洋画)

昭和二十五年五月十五日～昭和三十年三

月五日 在職

籠球画

昭和二十四年十月第五回日展出品作

無鑑査

上部中央・チョーク・横方向

595

上部左・チョーク・方向

(直線)

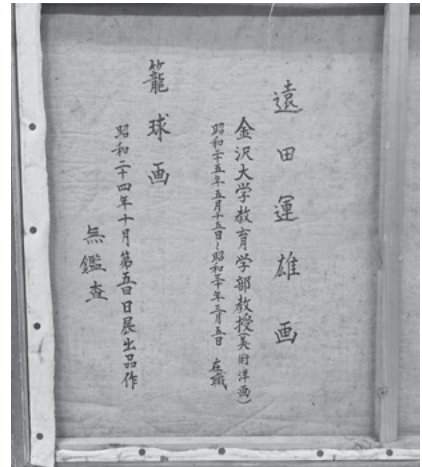


図7 支持体・裏面 左下

本資料は、全体的に汚損の堆積や画面の損傷が目立つ。額装はされているがグレージングと裏板はない。むき出しの状態のまま人の出入りの多い空間で展示されていた時期があるためか、画面・裏面ともに保存状態は芳しくない。

## 2.2 資料の損傷状態

損傷状態の概要は以下のとおりである。

[作品・画面 (絵具層、地塗り層)]

- ・全体的に汚損している。
- ・キャンパスの固定が緩み、全体的に大きな凸凹が多数ある。
- ・表層の光沢は均一に薄く、保護ワニスは塗布されなかったと思われる。
- ・絵具層の剥落、亀裂が多数生じており、地塗り層まで達している損傷も非常に多い。とくに支持体の凸凹周辺には、変形に伴う剥落および亀裂が多数発生している。(図8)
- ・部分的に補彩と思われる処置痕がある。大胆な筆致で損傷箇所からはみ出すように色を重ねているため、目視で判別できる。(図9)
- ・側面には白色の地塗り層が確認できる。剥落箇所をみると、白色の地塗り層の上に、複数の色の層を重ねていることがわかる。(図10)
- ・右下に黒色の絵具が飛び散るように付着している。(図11)

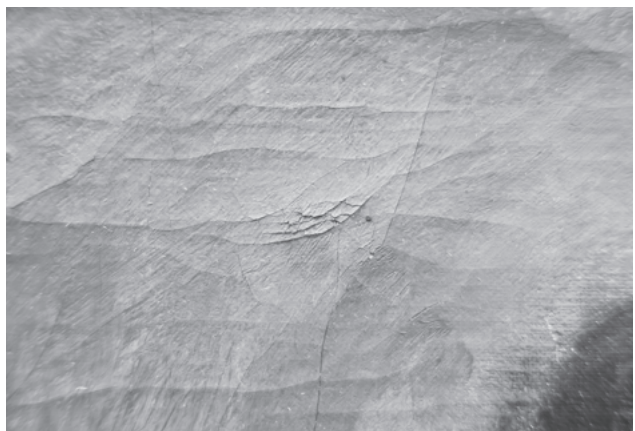


図8 画面・亀裂部分



図9 画面・補彩?



図10 画面・剥落部分

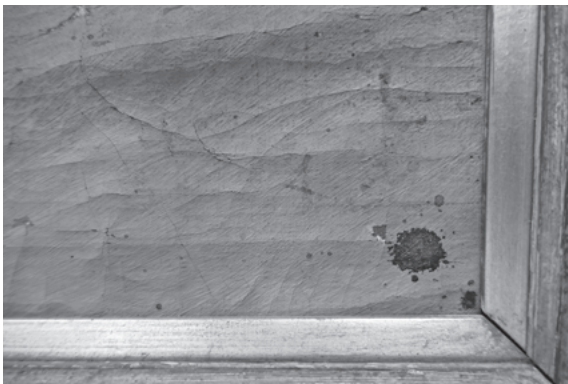


図11 画面・付着物

[支持体・付属物 (木枠)]

- ・全体的に汚損し、とくに凸凹部分に埃が堆積している。
- ・キャンバスの固定が緩み、全体的に大きな凸凹が多数ある。
- ・中央と四辺周辺には木枠当たりが生じており、斜光画像 (図3、4) では画面上にはっきりと木枠の形がみとれる。
- ・裏面側、キャンバスを固定している画鋸が錆びており周囲が汚損している。
- ・裏面、右上に紙片の付着物がある。接着剤により添付していたと思われる。
- ・木枠の棧に埃が堆積している。(図12)

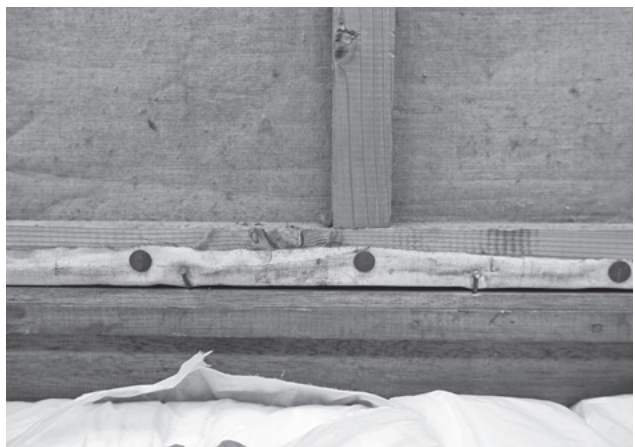


図12 裏面・木枠の汚損

[額縁]

- ・グレーシングおよび裏板はない。
- ・入れ子に打たれた釘(上辺中央1本、左辺中央1本、右辺中央1本、下辺中央2本)で作品を固定している。(図13)
- ・小規模な欠損が多数あり、木地や白い下地が露出している。
- ・古い釘穴およびネジ穴が複数ある。
- ・吊り金具として、左側には釘、右側には丸ヒートンが1ヶ所ずつ装着されており、吊り紐代わりに針金が付いている。いずれの金具も錆びている。(図14、15)

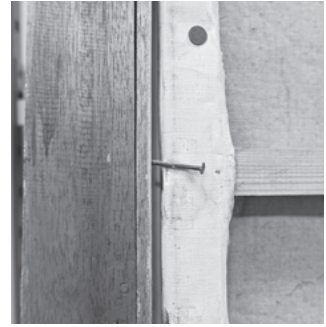


図13 裏面・旧留め金具



図14 裏面・旧吊り金具 右



図15 裏面・旧吊り金具 左

- ・入れ子とキャンパスの間に約1cmの隙間がある。額のサイズが作品に合っていない、もしくはオリジナルの木枠から張りなおされた可能性が考えられるが、今回の処置では詳細な調査は行わなかったため、原因は特定できていない。
- ・吊り金具の釘と入れ子を固定する釘が、一部きちんと刺さりきっていない。このためドロ足側面から打たれた釘に入れ子が押されて湾曲している。(図16)
- ・上部に虫卵の付着がある。(図17)



図16 裏面・入れ子が湾曲し隙間ができている



図17 裏面・虫卵



### 3 処置方針

博物館や美術館において、自館内で本格的な修復処置を行える館は限られている。多くの館では、損傷した資料があっても処置はしないか、展示などに際して対処療法的に必要な最低限の簡易処置を実施するにとどまっている。本格修理を実施しない、あるいはできない要因は時間・人員・予算など様々だが、博物館の現場では「狭く・深く・少なく」より、「広く・浅く・多く」の資料に対応することが求められる。

今回の処置も同様に、最終的な目的および目標は、短時間で安全に展示できる状態にすることであり、資料の本格的な修復ではない。以上のことを踏まえて下記のような処置方針を作成した。

- ・額、木枠およびキャンバス裏面の乾式洗浄（練り消しゴムによるクリーニング）
- ・額の部分的な補修・補強
- ・入れ子とキャンバスの上にスペーサー（アーカイバルボード）を追加
- ・入れ子受け部分に、緩衝材としてフェルトを貼り付け
- ・作品固定用の釘をT字金具（ステンレス）に変更
- ・吊り金具用の土台（木片）および新規吊り金具を装着
- ・ドロ足（キャンバス周辺の木部）に裏板土台としてアーカイバルボードを追加（裏板とともに木ねじで固定）
- ・裏板（ポリカーボネート板）を装着

### 4 処置内容

上記の方針に沿って、以下の工程を実施した。

処置期間：2022年4月26日～6月29日

作業員：金沢大学資料館スタッフ 3名

#### ① 状態調査・記録撮影

デジタルカメラによる全体および部分の写真撮影を行い、資料の片面から強い光で照射する斜光画像も撮影した。（図3、4）斜光撮影では、資料の側面から照明を当てることで表層の凸凹が強調されるため、支持体や絵具層の変形・浮き上がり・亀裂といった損傷を確認するのに適している。今回は資料に向かって左側面より照射し、支持体の波打ちや絵具層の亀裂などを確認することができた。また、とくに損傷部分は接写を多用し現状記録に努めた。

#### ② 旧留め具の除去・旧吊り金具の除去・作品の取り外し

下辺以外の3辺には入れ子と作品の間に隙間があり、入れ子に接していない部分があったため、作品の固定が非常に不安定であった。加えて、作品を留めていた釘は錆びており固定も緩んでいたため、釘はすべて除去し、留め具はより強固なステンレス製のT字金具に新調することとした。また、吊り金具は左右で異なり、吊り紐代わりの針金も機能していなかったため除去し、これも新調した。

### ③ 支持体、木枠、額の乾式洗浄

支持体および木枠は著しく汚損していたため、練り消しゴムによる乾式洗浄を行った。とくに支持体は埃がキャンバスの網目に入り込んでいたため、練り消しゴムに吸着させるように洗浄を行った。この際、強く押しすぎると緩んだキャンバスが動き、凸凹部分に発生した損傷を悪化させる恐れがあったため、わずかな力で複数回往復することで汚れを除去することに努めた。目安としては、練り消しゴムに目視で汚れが付着しなくなるまでこれを繰り返した。完全に汚れを除去できたわけではないが、作業前と作業後の画像を比較すると効果ははっきりと見て取れる。(図18、19)なお、裏書き部分については、練り消しゴムが当たらないように注意を払い、周辺は避けて洗浄した。

木枠および額についても、同様に練り消しゴムに汚れが付着しなくなるまで洗浄を行った。とくに作品の画面と接する入れ子部分は入念に清掃を行った。(図20、21)

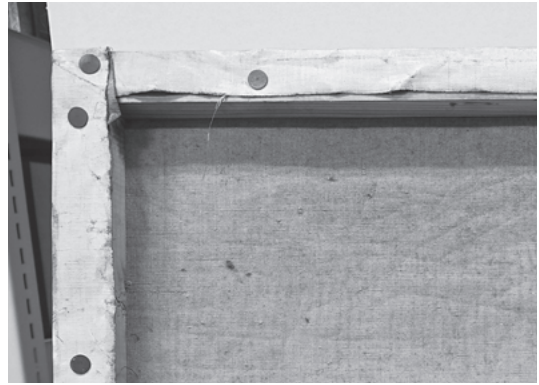


図18 裏面・洗浄前



図19 裏面・洗浄後

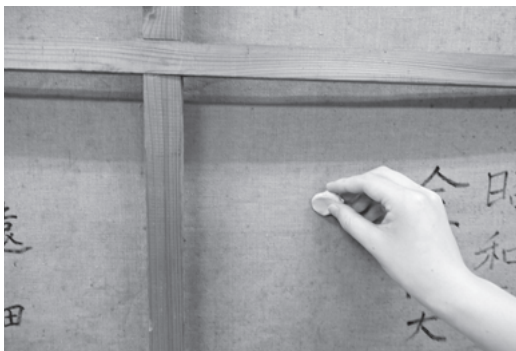


図20 裏面・洗浄中



図21 額・洗浄中

④ 額の補強（入れ子の処理、欠損部の強化）

旧吊り金具の釘に押されていた左上部の入れ子は、長年変形していたためか、内側に湾曲する癖がついていた。この隙間を埋めるために、部分的にアクリル系接着剤を挿入し強化した。（図22）比較的大きなネジ穴や欠損部は、穴周辺の木地が落下しやすくなっていたため、接着剤を塗布し固定した。（図23）

また、木製の入れ子に画面が直接触れないように、緩衝材として黒色のフェルトを入れ子に接着した。（図24）



図22 額・入れ子の強化



図23 額・欠損部分の補強



図24 額・入れ子にフェルト貼付け

⑤ 作品の再固定（スペーサーの挿入・新規留め具の装着）

額および支持体の洗浄後、作品を額に再固定した。表側から見た際に作品と入れ子の間に隙間ができないよう、固定位置を確認しながら適当な本数のスペーサーを挿入した。スペーサーを入れることで各辺の隙間を埋め、それぞれの辺が入れ子に接地するように調整した。スペーサーにはアーカイバルボードを使用した。（図25）

作品を額に固定する新規留め具としてT字金具を使用し、左右辺3か所・上下辺2か所の計10か所で固定した。作品がドロ足から若干はみ出したので、T字金具の曲げ加減を調整し作品に負担がかからないように注意した。（図26）

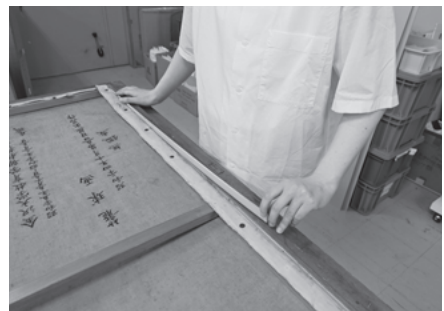


図25 額・スペーサーの挿入

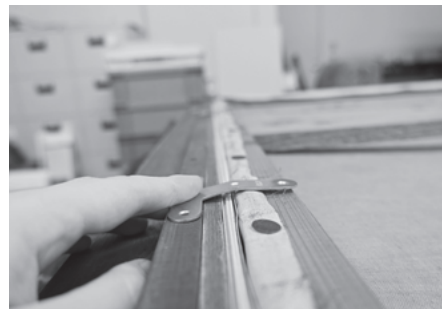


図26 額・新規留め金具の調整

#### ⑥ 新規裏板装着

新規裏板としてポリカーボネート板を装着した。本資料は作品サイズが大きく、額が付属していることで全体の重量があったため、軽くて丈夫な素材としてポリカーボネートを採用した。また、裏板の四辺には埃が入りこまないよう、中性紙のシーリングテープによるテーピングを施した。(図27)



図27 裏板周囲のテーピング

#### ⑦ 吊り金具用土台・吊り金具の装着

額の裏面に直接吊り金具を装着すると、吊り金具の輪がドロ足より低い位置にくるため、展示の際に、相手側(壁面もしくはワイヤー)の金具に届かない可能性がある。届いても掛けにくい状態になるため、作業の難易度が上がり事故の要因になる危険がある。そのため金具の下に木片の土台を設置し、吊り金具の上辺が作品裏面と揃う高さに調整した。(図28、29)



図28 新規吊り金具



図29 新規吊り金具と土台

## 5 所見

今回の状態調査および処置をとおして、一部の剥落箇所に後年の補彩と思われる処置痕が確認された。(図30、31) 一般的に、修復家や修復工房が実施するような補彩は、欠損箇所を炭酸カルシウムやワックスで充填し、周辺の絵具層に馴染むように充填箇所の高さや表面の凸凹を整形した上で、充填部分にのみ着彩する。このとき、オリジナル部分には補彩の絵具がのらないように細心の注意を払う必要がある。本資料にみられる補彩と思われる処置では、欠損部分の充填は行われておらず、周囲のオリジナルの絵具層に大きくはみ出すかたちで絵具が描き足されている。また、一般的な補彩は、可能な限り処置(損傷)部分を目立たなくするために行われるものであり、補彩絵具を点や線状にのせることで細かく微調整を行いながら周囲の色味に近づけることを目指すが、本資料の処置は周辺より濃い絵具を使用したのか、あるいは経年により加筆した絵具が変色したのか、一見するとシミのように見え却って目を引く状態である。さらに、地塗り層まで剥落し支持体が露



出した箇所そのまま色を補填している部分もあるが、油絵具であれ水彩絵具であれ、キャンバスに染みた色を除去することは難しく、オリジナルの保護という観点にも逆行しており、修復の専門家による処置とは考えにくい。本資料を本格的に修復する機会があれば、後から加えられたと思われる着彩部分を除去し再処置を行うことが適切であると考えられるが、作者本人の手による「手直し」の可能性もあるため、慎重に判断する必要がある。

また、今回の処置でとくに重要であったのは裏板の装着である。処置前は、キャンバスが緩んでいることから、わずかな振動でもキャンバス全体で風圧を受けて大きく揺れ動く状態であった。支持体が動くたびに、変形箇所周辺の絵具層の損傷がさらに進行する危険性があったため、裏板を装着し支持体の動きを抑えることを目指した。裏板やグレージングは、作品を汚損から守るだけでなく、風圧や温湿度の変化による負荷を軽減し、製品によっては照度や紫外線から画面を保護することも可能になる。低反射処理を施していないグレージングは照明に反射し鑑賞の妨げになることもあるが、様々な展示環境で活用される資料の長期的な保存を考える上では重要な要素となる。

ただし、裏板やグレージングの装着はあくまで部分的な措置であり、すでに発生している状態そのものを改善することはできない。将来的には一度木枠から支持体を外し、剥落および周辺の絵具層の浮き上がり接着や支持体の伸展といった、本格的な修復処置を施すことが望ましいと考える。

## 6 博物館で資料を「処置」するために

前述したとおり、博物館において本格修理を行う機会は決して多くない。今回の作業は「博物館的」修復作業の典型であろう。本資料は大型であったため処置には約2か月を要したが、実施したことはミニマムな項目ばかりであり、必要に迫られていなければ一度に全て行う必要もなかった。今回は人が行き交う場所での展示を予定していたため、裏板の設置等を行なったが、古い吊り金具を交換するだけでも、展示の際の安全性は大きく向上した。また、資料に直接変更を加えたのは裏



図30 補彩痕

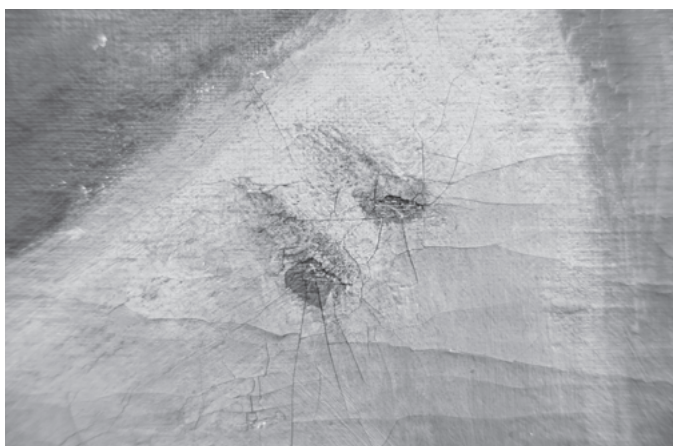


図31 補彩痕



面の清掃のみであり、額や金具といった作品の周囲の状態を変更する処置が主な作業であった。資料の修復には資料周囲の環境や状態の改善も含まれており、こうした処置で対応できることも多い。

資料の「周囲」の範囲には、資料を保管する箱や、展示室や収蔵庫などといった資料を取り巻く広義および狭義の様々な保存環境が存在している。例えば、収蔵庫では段ボールなどの酸性紙の使用量を極力減らす、展示室や収蔵庫の清掃作業の頻度を上げる、収蔵庫内を整理するなど、小さな作業を積み重ねることによって、通常業務内で資料の保存環境を改善することは可能であり、こうした処置こそが資料を安定的に保管していくための基本的な保存作業である。また、展示室や収蔵庫でこういった作業が増えることによって、資料を目にする機会が自ずと増えるという利点もある。棚卸しのような形で定期的に全ての収蔵資料を点検できれば理想的だが、とくに活用頻度の少ない資料は状態を確認する機会も少なくなるため、日常的に目にとめる機会を増やしておくことで状態の変化を捉えやすくなる。大々的な作業が難しくとも、冊子の資料が傾き始めていたら元に戻すような小さな「処置」でも、資料状態の悪化は防ぐことができる。

状態が思わしくない資料について根本的な修復を実施するという判断を適切に行うことももちろん必要だが、資料に直接手を加えるような本格修理は選択肢としては最後の手段であり、とくに人的・予算的な制限の多い博物館の現場においては、本格修理を実施しなければならない状況を避けるためにも、継続的に予防保存に取り組むことが求められている。モノ資料だけでも7万7千点を所蔵する当館においても、短・中・長期的なそれぞれの視点に立って、収蔵資料全体を対象とする処置と資料单体に対する個別的な処置を織り交ぜながら、工程や作業内容を取捨選択しつつ改善を目指すことが重要であると考えられる。

今回の処置にあたり、本学技術支援センターおよび学長秘書室には多大なるご支援を賜りました。ここに記して、心より感謝申し上げます。

## 註

- 1 『昭和二十五年二月七日現在 職員名簿 金沢大学』 p.18

## 【参考文献】

- 神庭信之（東京国立博物館）2014『博物館資料の臨床保存学』  
石川県立美術館 1987『石川県立美術館 紀要』第3号、pp.105-110  
今井治男 1995「新収蔵資料紹介」『金沢大学 資料館だより』No.6、pp.5-11  
金沢大学資料館 1996「新収蔵資料紹介」『金沢大学 資料館だより』No.7、p.12  
石川県立美術館・（一財）石川県文化財保存修復協会編 2021『石川県文化財保存修復工房報告書 平成29年度～令和元年度』

【参考資料】

表1 遠田運雄《籠球》修復用使用材料一覧

商品名	仕様 (サイズmm)	備考
木ねじ 皿頭	材質：ステンレス／サイズ：呼び径3.1x長さ32	土台、吊り金具固定用
木ねじ 丸頭	材質：ステンレス／サイズ：呼び径3.1x長さ22	裏板固定用
ワッシャー (JIS規格)	材質：ステンレス (SUS) ／サイズ：M3 (内径3.3)	裏板固定用
T字金具	材質：ステンレス／サイズ：P4=44／穴5つ (下 図参照)	作品固定
ファームヒートン	材質：ステンレス／型番：FHT-90	新規吊り金具
プレキシトール B500	アクリル樹脂 (ラスコー社製)	額縁補修用接着剤
IZクリーナー		裏面・額縁清掃用練り消しゴム
アーカイバルボード	材質：中性紙	スペーサー
フレームシーリング テープ	材質：中性紙／品番：06150／ サイズ：幅32mm×25.3M巻 (リネコ社製)	裏板テーピング
ツインカーボ	種類：スタンダード クリアー サイズ：2000x2000 x 厚み4mm	裏板 (ポリカーボネート板)

